青森県小中学校教頭会会報　第116号

あおもり

目　次

１．巻頭言 …… 1
２．各支部研究活動の概要 …… 2
３．会員の広場「しずり雪」…… 14
４．４団体連絡協議会の概要 …… 22
５．編集後記 …… 24

巻頭言

今，学ぶべきことを考える

弘前市中学校教頭会　会長　後　藤　光　生

新型コロナウイルス感染症は，2019年12月に中国の武漢市で発生が確認され，わずか数か月ほどの間にパンデミックといわれる世界的な流行となりました。日本では，2020年１月15日に最初の感染者が確認された後，５月中旬までに全国で合計１万５千人を越える感染者，650人を越える死者が確認されています。

当時，感染は死を予感させ，マスクや消毒液の購入に必死になっていたことを思い出します。また，学校では，感染者が出た際，医療・介護施設等従事者からの問合せがよせられ，関係機関には，何時間目の何の時間に，周囲に誰がどこに座っていたのか，すべて調べて報告しなければならず，のびのびとした教育とは，ほど遠い状況にありました。

それ以来，子どもたちとはマスク越しのお付き合いとなり，顔写真，部活動や給食時のマスクを外した姿から顔のイメージを働かせて接してきましたが，生徒理解を妨げる要因となっておりました。また，多くの教育活動が制限され，子どもたちと保護者の皆様には，申し訳ない気持ちでいっぱいでした。それでも座席の工夫，人数制限，分散参加等，工夫を凝らし，子どもたちの学びを保障してきました。今年度は，２年連続，断念していた本校の東京方面での修学旅行が実施されました。未だ収束することなく猛威を振るっていますが，着実に前進していることを実感しました。

さて，本支部では，今年度，弘前市中学校校長・教頭合同研修会で，弘前大学男女共同参画推進室の山下先生をお招きし，性的マイノリティーや人権の問題などについてお話しいただきました。また，弘前地区小学校教頭会・弘前市中学校教頭会合同研修会では，弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）の天坂先生をお招きし，ご自身の経験にもとづいた学校の危機管理についてお話しいただきました。サッカーワールドカップでは，母国や開催国での性差別や性的マイノリティーの問題に対し，パブリックビューイングを設置しない。国歌を歌わない。象徴となる腕章を付けようとする等，抗議の意思を示そうとした人々やチームが多数ありました。また，日本のチームは，当たりの強さ，視野の広さ，ドリブルの巧みさ，走力といった選手一人一人の個性を生かし，献身的な働きにより強豪国を撃破して世界に衝撃を与えました。

教育現場でも性的マイノリティーを含め，子どもたち一人一人の特性や思いを大切にし，活躍の場を作り，自己有用感を高めなければならないと思いました。

また，地球温暖化に伴い，近年，世界各地で干ばつ，大雨，台風等の強烈な異常気象が発生しています。昨年８月の大雨では，弘前市の多くの学校が避難所となりました。避難所設置のため，市役所防災課でレクチャーを受けた他課の若者が本校に来ました。避難口の標記，使用できる範囲の確認，トイレや更衣室の確保，卓球台での仕切り，パイプ椅子やマットの貸し出し，ペットの持ち込みの有無，アルファー米や水の確認等，慌ただしいやり取りを行い，何とか地域住民を迎え入れました。

学校は，日頃の安全点検や訓練を徹底し，実効性のある危機管理を行い，子どもたちや地域住民にとって安全・安心な場所でなければならないと思いました。

今後も，現場のニーズに応じた教頭会の学びが充実することを願います。

結びに，今年度の諸活動にお力添えいただいた皆様並びに県内各地区小中学校教頭会の皆様，新型コロナウイルス感染症への対策が続く，先の見通しが難しい状況は続いておりますが，ご健康に留意され，それぞれの立場でご活躍されることを心よりお祈り申し上げます。

青森市小支部

研究活動の概要

第12期全国共通課題の第４課題「組織・運営に関する課題」を受けての研究３年次である。

１　研究主題

「地域の力を学校組織の中に生かすための教頭としての役割」

２　主題設定の理由

「社会に開かれた教育課程」を実現するための組織体制づくりを推進していくためには，家庭や地域の人材を必要とする教育活動をより明確にし，学校・家庭・地域で共有できるものを創り上げていくこと，家庭や地域が学校の教育活動に関わり支援していただけるように必要な人材やねらい，時期等をはっきり示すことが大切であること，そして，学校と家庭・地域との窓口である教頭がリーダーシップを発揮していくことが大切である。

２年次は，学校支援コーディネーターと学校との関わりに焦点をあて，「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた教頭の役割を明らかにしていこうと考え，それぞれ実践を積み重ねてきた。昨年度もコロナ禍の影響により，地域の方々や保護者と一緒になった活動が難しい中，各校の創意工夫により多くの成果を得るとともに新たな３つの課題が明らかとなった。

①学校支援コーディネーターや地域学校協働活動推進員の後継者不足。

②ボランティアの固定化と高齢化及び打合せや連絡調整の負担感の増加。

③地域や保護者の方の理解不足や関心の低さ。

以上のことから，学校支援コーディネーターや地域学校協働活動推進員，町会長や町内の皆さんと学校との関わり方がキーワードとなりそうである。

３年次は，上記の課題解決に向け，昨年度までの関わり方を生かしながら，さらに各校で創意工夫を加え，「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた教頭の役割を明らかにし，さらなる実践の共有化を図っていきたい。

３　研究のねらい

「社会に開かれた教育課程」に向け，学校と家庭及び地域との連携・協働を推進するために，地域人材の活用と組織体制づくりにおける教頭の役割を明らかにする。

４　研究の概要

⑴学校支援コーディネーターの活用について

⑵地域人材（ボランティア）の活用について

⑶コミュニティ・スクールについて（ＣＳ導入校のみの調査）

５　研究のまとめ

⑴地域学校協働活動における学校支援コーディネーター・地域学校協働活動推進員の活用について

○各校から多岐にわたる学校支援への活用例が見られた。図書ボランティア，登下校見守り，学習支援等，児童に直接関わる内容が多かった。また，地域独自の伝承活動に取り組んでいる学校も見られた。

○学校組織への影響については，教職員のボランティア活動に対する意識の向上や働き方改革における教職員の負担軽減につながっている意見があった。児童の教育に良い影響を与えているとの意見も多かった。

●人材の高齢化や人手不足が挙げられた。リーダーとなる方やボランティアの人材確保に向けて苦労している学校が多かった。解決策として，人材リストの作成やネットワークの構築・拡大，募集方法の工夫などが挙げられた。

⑵コミュニティ・スクールに関して

○小中連携や小小連携において導入校で独自の実践が組織の活性化につながっている。

○保護者や地域を巻き込んでの活動が活性化を生んでいる。

○これからも地域と学校の活性化に向けて組織として積極的に関わり合いを継続したい。

各校の取組は，大変参考になる内容が多かった。今現在の各校で抱えている課題を一つでも解決に向かうことができるよう，やれることから一歩ずつ取り組んでいきたい。

青森市中支部

研究活動の概要

１　研究主題

「子どもや保護者・地域の人々に信頼される次世代の学校づくりと教頭の関わり」

～個々の教職員の活動が有機的に結びつく組織・運営による，持続可能な取組を目指して～

２　主題設定の理由

本支部では，研究主題「子どもや保護者・地域の人々に信頼される次世代の学校づくりと教頭の関わり」について，３年計画による調査・研究・考察・整理を通して，教頭として果たすべき役割を明らかにすることをねらいとして研究を進めることとした。

３　研究のねらい

３年計画の３年目であり，調査研究を通して，教頭として果たすべき役割を明らかにすることをねらいとして以下の研究を行うこととする。

⑴令和２年度「緊急事態における学校運営体制の構築～新型コロナウイルス感染症への対応～」

⑵令和３年度「教育活動と組織運営の活性化を図るカリキュラム・マネジメントの推進」

⑶令和４年度「学び続ける教員を目指した教員研修の充実」

４　研究の概要

⑴会員を３班に分け，班ごとに調査項目の内容や研究の進め方を検討，決定する。

ア　主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善を実現するためのＩＣＴ活用の推進と教頭の役割

イ　「複数担任制」の推進と教頭の役割

ウ　学校運営への参画意識を高める現職教育の推進と教頭の役割

⑵アンケート調査を実施し，現状，運営上の課題と工夫，教頭の関わり方等をまとめる。

⑶各班で実践事例や意識調査をもとに，班長が中心となって教頭の役割についてまとめる。

⑷会員全員で検討し，問題解決に向けての方向性を探る。

⑸研究については，具体的調査項目を設定し，分析・考察を行うとともに講師を招き，研修会を開催する。（10月28日（金）実施）

５　研究の成果（○）と課題（▲）

⑴「主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善」を実現するためのＩＣＴの活用の推進と教頭の役割

○ＩＣＴを活用することで，課題の配布や回収が容易になり，個別対応（定着度合い，評価，やりとり）がしやすくなったと約８割の教頭が評価している。個別の対応が増加することは，個の力を伸ばす上でも好ましいことである。

▲個別対応のしやすさは，時間や負担を増加させる要因をはらんでいる。配布や回収が容易になると，そのことにともなって評価やコメント等フィードバックする量が増加する傾向がある。個別の確認を数値化するなど工夫し，効率よく生徒にフィードバックするための研究は引き続き必要である。

⑵「複数担任制」の推進と教頭の役割

○現場で一緒に働く中で先輩や上司から仕事のやり方を学んでいく取組が活発に行われ，先生方も密にコミュニケーションを取り，若手教員がベテランの先生から様々なノウハウを学ぶことができる。ＯＪＴの推進が若手育成につながる。

▲共通理解の場の設定及び引き継ぎが課題であり，これが徹底されなければ生徒理解を誤解したり，保護者に適切な対応ができなかったりと危機につながりかねない。各校では，その対応としてノートやＩＣＴを活用するなど工夫しているが，正確に伝達するためには口頭の引き継ぎが重要である。

⑶学校運営への参画意識を高める現職教育の推進と教頭の役割

○「校内」での職員室における「同僚性」と授業研究や校務分掌など，大きな役割を「仕事」としてやり遂げた時が成長できたと感じており，「教員は学校で育つ」ことを経験として感じている。

▲教員は，校内の職務を通し，先輩や同僚の助言を受けながら成長してきたと実感している。研修や研究による知識や理論をもとに，日々の教育活動を通して，その資質・能力を育成していくものであり，育成の方法としてＯＪＴが必要不可欠な取組であると認識しておかなければならない。

弘前地区小支部

研究活動の概要

１　研究主題

社会に開かれた教育課程実現のための教頭の関わり
～コミュニティ・スクールに関する研究を通して～
（３年次）

２　主題設定の理由

平成27年12月に中央教育審議会答申「新しい時代の教育と地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」が取りまとめられた。これによると，時代の変化に伴う学校と地域の在り方を改めて見直す必要があるとしている。そして「地域とともにある学校への転換」「子供も大人も学び合い育ち合う教育体制の構築」「学校を核とした地域づくりの推進」を目指して，コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度。以下「ＣＳ」という。）を推進するため，学校運営協議会の設置の努力義務化やその役割の充実などを内容とする，「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正が行われ，平成29年４月１日に施行された。

弘前市においても，学校・家庭・地域が各々の役割と責任をもって連携・協働し，子供の健やかな成長に向かって主体的に関わっていく，自立的・持続的な教育機能を有した圏域（中学校区）を「教育自立圏」とし，その推進を掲げ，平成28年度からの二箇年の「教育自立圏モデル事業」を経て，準備が整った学校から順次，学校運営協議会を設置し，ＣＳを導入するよう進めている。

しかし，ＣＳを導入・推進していく上では，「学校運営協議会を置くメリットが，教職員及び保護者，学校関係者に十分に理解されていない」「保護者や地域住民の意見の反映を図るという機能が積極的に活用されていない」「ＣＳの導入が，社会に開かれた教育課程とどのように結びつくのか分からない」などの課題も挙げられている。

これらを踏まえ，弘前地区小学校教頭会では，全国公立学校教頭会第12期（令和２年度～４年度）全国共通研究課題第１課題「教育課程に関する課題」の具体的研究として，社会に開かれた教育課程実現のための教頭の関わりはどうあればよいかを，ＣＳに関する研究を通して明らかにしていきたいと考え，本主題を設定した。

３　研究のねらい

各校における，ＣＳの実態把握に関する調査研究から，現状と課題を捉え，社会に開かれた教育課程実現のための教頭の関わり方について明らかにする。

４　研究の概要（令和４年度）

・１年次の調査及び２年次の研究を整理し，ＣＳの進捗状況に応じて２つのグループに分け，それぞれのグループにおける課題に対して，教頭の関わりを系統的にまとめる。
・４月15日（金）小学校教頭会総会・研修会において研究計画承認
・５月10日（火）第１回研究部会において研究部組織（役割）決定，調査内容検討
・６月３日（金）小学校教頭会全体研修会において調査内容・方法・研究日程確認
・８月18日（木）第２回研究部会において，グループごとの熟議
・12月２日（金）小学校教頭会全体研修会において，研究のまとめを発表
・12月13日（火）第３回研究部会において，研究集録「あすなろ第56集」及び研究紀要第51号原稿推敲

【第13期研究に向けて】
・９月20日（火）第13期研究主題・研究内容に係るアンケート調査実施
・12月13日（火）第３回研究部会において，アンケート結果をもとに研究主題の検討
・１月19日（木）第２回理事会において，研究主題の承認
・１月26日（木）第４回研究部会において，研究内容・副題の検討
・２月10日（金）小学校教頭会全体研修会において，次年度の見通しの報告

５　研究の成果と課題

⑴成果

３年間の研究を通して，コミュニティ・スクールの導入期・推進期において，ＣＳの理念や仕組みの共有が不十分であったことや，教職員・保護者・地域の順に理解を深化させ，「熟議」の場を設けて共有していくことが重要であることが明らかとなった。

⑵課題

「学校教育目標は校長が定めるものである」という認識が強いために，「熟議」「合意形成」によるＣＳ参加型の学校運営ビジョンの策定は難しいのが現状である。小さなことから，地域や保護者とともに課題を解決する場を設けて，実現性・実効性を考えた取組を提言していきたい。

弘前市中支部

研究活動の概要

１　研究主題

『学校課題を捉え，それを解決する教育課程はどうあればよいか』

２　主題設定の理由

中教審答申においては，「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し，連携・協働しながら，新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すこと，学習指導要領等が「学びの地図」として，学校，家庭，地域の関係者が幅広く共有し活用できるよう枠組みの見直しを進め，各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められた。

そのため，それぞれの学校において，必要な学習内容をどのように学び，どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら，社会との連携・協働により，学校組織全体としての指導力の向上を図っていくことが重要である。

また，学習指導要領総則編第３章では，学校が生徒や地域の実態を適切に把握し教育内容や時間の配分，必要な人的体制の確保，教育課程の実施状況に基づく改善を通して教育活動の質を向上させ，学習効果の最大化に努めることが示された。

以上のことにより，教頭として「社会に開かれた教育課程」，「カリキュラム・マネジメント」にどのように関わればよいかを明らかにすることが必要と考え，本主題を設定した。

３　研究のねらい

各学校の置かれている状況を踏まえ，保護者や地域の声を生かした社会に開かれた教育課程，学校改善を推進し，生徒の豊かな人間性と創造性を育むために，教頭としてどのように関わればよいかを明らかにする。

４　研究年次計画

一年次…各校の現状，先行事例と課題についての情報交換と協議

二年次…課題解決の方策研究と具体的実践研究

三年次…研究のまとめ

５　今年度の研究の概要

⑴教育課程に関する３年間の実態や変化についての各校調査

⑵教頭の役割についてのまとめ

６　今年度の研究の成果と課題

この３年間を振り返ると，臨時休校による授業時数の確保，感染防止のため体験的な活動の中止や縮小，授業におけるグループ活動の制限など，さまざまな感染予防対策への対応に追われながらも，教育課程の実践を推進してきた。その中で今年度の教育課程に関するアンケート（４件法で実施）を分析すると，47の質問の内，39問が3.0以上であった。特に，授業に関すること4.0，生徒相談に関すること3.8が高い値であった。生徒に向き合って，丁寧に授業が行われていると推察される。また，自由記述欄に「コロナ禍でも地域との協働や地域の資源を生かした学習活動が中断しないように，情報収集，共有を行い，教育課程の編成，実践をした」「できるだけ生徒の成長が期待できる活動を実施するという視点で教育課程を編成している」などの記述が見られ，学校課題に向けて教育課程を編成し，実施しているのが見て取れたことは成果である。教頭が学校課題の解決に対する校長の意を汲み，教育課程の編成に反映されるよう，教務主任や各分掌の長との橋渡し役に努めた結果であろう。

以上から，「今，自分がしていることは子どものためになっているのか」「学校を良い方向へ進めていくことができているのか」という根本に立ち返り，校長のグランドデザインを，教職員がＰＤＣＡサイクルに基づく取組の検証・改善を繰り返すことに教頭が関わることで，学校教育が活性化し，学校課題を解決する推進力が強化されると思われる。

八戸市小支部

研究活動の概要

第12期全国統一研究主題の第２課題「子供の発達に関する課題」を受けての研究３年次である。

１　研究主題

地域とともに子供を育てる学校づくりのための教頭の役割
～持続可能な地域密着型教育の推進を通して～

２　研究主題について

八戸市では，平成20年度から学校経営の視点の一つに「地域密着型教育の趣旨を生かした開かれた学校づくりの推進」を掲げている。地域密着型教育とは「よりよい教育環境・支援体制の整備」「ふるさとに誇りと愛着をもつ子供の育成」「明るく活力あるまちづくり」を目指した事業で，保護者・地域住民の学校運営への参画を推進している。

10年以上にわたる地域密着型教育の取組を整理し，調査や実践を通して，学校と保護者・地域との協働による子育てを進める上での教頭の役割を明らかにし，活用していくことが本研究の目的である。当部会では，この研究が各校において「社会に開かれた教育課程の実現」「よりよい学校環境と支援体制等」を図っていく際の一助になればと考え，本主題を設定した。

３　研究のねらい

各小学校の地域密着型教育の取組の成果を明らかにし，その中で見出された教頭の関わりの有無や必要性について調査や実践を通して検証していくことで，地域とともに子供を育てる学校づくりにおける教頭の役割を明確化していく。

４　研究の概要

前年度までにおける八戸市内全小学校の地域密着型教育の取組を整理し，教頭の役割やコーディネーターの活用に関するアンケート調査を実施した。調査結果をもとに，地域密着型教育における効果的な教頭の役割を明らかにした。

⑴調査内容

①地域密着型教育コーディネーター（以下コーディネーターとする）の現状について
②コーディネーターの活用について
③コーディネーターの人材確保について
④ボランティアの活用の仕方について
⑤コロナ禍において工夫したことについて

⑵分析と考察

○コロナ禍ではあるが，コーディネーターやボランティアを効果的に活用している学校が見られた。教頭とコーディネーターとの関わりの重要性が明らかになった。

５　研究のまとめ

⑴成果

○持続可能な地域密着型教育を推進していくためには，日頃から学校の実情とコーディネーターやボランティアに求める支援が何かを明らかにすることで，教頭としての役割が見えてくる。
○今，目の前にいる保護者やＰＴＡ役員が将来も学校教育をコーディネートしたり，ボランティアをして支えたりしてくださる人材であるという意識をもつことで，現在関わっている人とのつながりが，いかに大切であるかを認識することができた。
○教頭とコーディネーターの関係性が良好だと，ボランティアの活用率が高くなることがわかった。（年度の早い段階での顔合せが必要である。）

⑵課題

○コーディネーターやボランティアが高齢化し，新たな人材確保が必要であるが，引き受けてくれる人材探しが難航している。次年度は成功事例を共有していきたい。
○持続可能なものとするためには，先を見据え早い段階から年間計画の整備や次の人材の発掘に努め，誰が担っても円滑に役割を引き継げる体制を構築していく必要がある。
○教頭の負担感軽減が，コーディネーターの負担感増によって解消されるのではなく，コーディネーター自身が地域密着型教育に関わることがやりがいとなるような働きかけの工夫が必要である。
○今後は，各校個々の取り組みではなく，情報を共有し，持続可能な地域密着型教育に取り組んでいくとさらによいものとなっていく。

八戸市中支部

研究活動の概要

１　研究主題（３年次／３年計画）

子供を育てる学校づくりのための教頭の役割
「～小中連携を生かした，生徒の学ぶ意欲を高める工夫を通して～」

２　主題設定の理由

八戸市では，第２課題の内容「生徒指導」「キャリア教育」「特別支援教育」「情報活用能力の育成」に取り組んでいる。各校において校内・校外研修を進め，関係機関との連携を密にとり，ＰＤＣＡサイクルを活用して検証を行いながら，常により良いものを目指して実践を積み重ねている。また，予測が難しい将来を子供たちが力強く生きていけるよう，小・中学校９年間を見通して取り組む教育実践も定着しつつある。

本会の研究主題は３年次となった。２年次である昨年度は，各校からの情報を共有し，これまでの取組の成果を振り返ることができた。前年度にも述べたが，本市の教育の骨格は地域密着型教育と小・中学校連携である。このことを踏まえ，また多くの学校が学校目標に「主体性」の文言を取り入れていることを参考としながら，これまでの八戸市における学校教育の成果と課題を軸に主題を設定した。

３　研究のねらい

昨年度は「生徒指導」「キャリア教育」「特別支援教育」「情報活用能力の育成」について，各校から報告された内容をまとめ，教頭会で共有することができた。一方，新型コロナウイルスの影響で計画していた研究内容を一部進めることができなかった。

また，昨年度末の研修会で「１人１台端末の取扱いや活用方法」「臨時休業時等における学習の進め方」が話題として挙げられた。当時本市では八戸版ＧＩＧＡスクール構想の下，ＩＣＴ環境の整備が進められており，２年次ではこれらの内容も取り上げることとした。

今年度は１人１台端末が生徒に配付されて３年目となる。活用については少しずつ習熟してきているが，さらに研修を深めなければならない。また成果や課題も十分整理できていないので，このことについて引き続き情報収集を行うこととした。

４　今年度の研究内容

市内各校の状況を確認するために以下の項目でアンケート調査を実施，分析する。

①（ア）八戸市の小・中ジョイントスクールの現状。
②（イ）「授業づくり」「居場所づくり」「絆づくり」の視点から，生徒の学ぶ意欲を高める工夫に関する実践について。
③（ウ）「主体性」を高める教育活動に当たる際の教頭としての関わりについて。
④（エ）研究内容の（ア）～（ウ）を関連付けながら，１人１台端末の活用についての情報収集。

５　研究の成果と課題

①八戸市の小・中ジョイントスクールの現状について
・コロナ禍のため当初の計画どおりに進めることができなかった学校も見られたが，場所や方法を工夫して授業参観や協議等を実施した学校も多かった。

②「授業づくり」「居場所づくり」「絆づくり」の視点から生徒の学ぶ意欲を高める工夫を意識した取組について
・「学ぶ意欲を高める工夫」については，話合い活動や縦割りグループ活動を取り入れるなど，「自尊感情を高める」こと，「自己効力感を高める」ことに取り組んだ学校が多く見られた。

③１人１台端末導入後の各校の取組について
・教科や領域の授業での活用に加え，生徒会活動における活用事例が多く見られた。生徒総会や生徒会役員選挙では，紙媒体資料の印刷等の手間が省けて時間にゆとりができ，話合い活動の充実に時間を活用できた。生徒たちは端末を，教師が思いつかないような様々な場面で活用するようになった。結果として生徒の主体的な活動につながっている。

６　まとめ

本市では，１人１台端末の活用が３年目を迎えた。そこで令和４年度は研究内容（エ）の「研究内容の（ア）～（ウ）を関連付けながら，１人１台端末の活用について市内各校の実践の情報収集を行う」，を主な取組として研究を進めてきた。その結果，各校から教科・領域，生徒会活動等での様々な実践報告が届いた。これまでは教師の指導の下に行われる使用が多かったが，生徒が主体的にアイディアを出して活用する事例が見られるようになった。

東津軽郡支部

研究活動の概要

第12期全国統一研究主題を受けた第４課題「組織・運営に関する課題」について，研究３年目となる今年度の研究活動の概要は次のとおりである。

１　研究主題

『教職員個々の資質・能力の向上により学校組織を高めるための教頭の役割』
～学校区における教育課題解決への取組を通して～

２　主題設定の理由

令和３年度は，郡内各中学校区ごとに教職員個々の資質・能力の向上により学校組織を高めるための教頭の役割について，学校区における教育課題の解決への取組を通して実践した事例の考察と協議を行った。そして，教頭がその取組の中で職員や保護者，地域とうまく関わりをもち，組織作りや研修会をリードしていくことによって，教職員の自己肯定感・有用感が高められたり，地域の協力を得られたりして課題が解決に向かったという成果も見られた。

第12期，３年目となる今年度は，郡小中教頭会の研究領域（第４課題【組織・運営に関する課題】）に関わって，教職員個々の資質・能力を伸ばし，学校課題を解決するために教頭としての関わり方・働きかけについて検証し，学校組織としての高まりを実践を通して明らかにしていく最終年度となる。そのため，昨年度に課題として挙げられた，『家庭や地域・関係機関との連携の充実』や『教頭の組織マネジメント力の向上』についてもその在り方について検証を重ねたい。

以上のような理由から，今年度を３年間の研究のまとめの年度と捉え，研究主題及びサブテーマを継続とした。

３　研究のねらい

⑴教職員個々の資質・能力の向上を図り，学校組織を高めるために，教頭として果たすべき役割を明らかにする。

⑵各校の学校課題解決のために，教育活動（研修等）への教頭の関わり方・働きかけについて，実践を通して明らかにする。

４　研究の概要

以下のような内容について取り上げ，中学校区ごとにその解決に向けた実践事例をもとに，教職員の資質・能力の向上や学校組織を高めるための教頭の役割について，考察と協議を行った。

⑴学校区における教育課題
- ＩＣＴ活用，学力向上，要支援児童生徒への対応，家庭への組織的な対応等

⑵組織マネジメント及びカリキュラム・マネジメント
- 教育活動の充実・改善，教員の指導力向上，校内研修の充実・体制整備，現職教育の充実等

⑶小・中及び地域との連携
- 小中連携活動の推進・改善，地域学校協働活動，地域連携等

５　研究のまとめ

⑴成果
- 関係者の力を結集し，チームとして情報や方向性を共有しながら課題解決に組織的・継続的に取り組んだことによって，様々な機会や方法で教職員の指導力向上を図ることができた。
- 会議資料等，ＩＣＴを活用することで事務作業の軽減やペーパーレス化につながった。
- 数日にわたり欠席する児童生徒に対し，ＩＣＴを家庭で使わせることで，遠隔授業に参加させることができ，学びを止めずに学習に取り組ませることができた。
- 小中連携で授業を参観し合ったり，分科会で話し合ったりしたことで，授業の成果と課題が明確になり，学力向上に向けた今後の取組について考えることができた。
- 校内研修について，研修主任と適時意見交換することで，見せ合い授業の実施やＩＣＴの活用方法を紹介する研修が行われ，学び合う教師集団が形成された。
- 各校区，学校の実態・実情に応じた校務分掌の見直しや改善に取り組んだことで，児童生徒と向き合う時間が確保され，本来の業務に自覚や目的を持って臨むようになった。

⑵課題
- 要支援児童生徒に関わる教員の業務が増えることにより，通常の教育活動に支障をきたすことがないように，バックアップ体制づくりや一時的な業務改善など対応を考えなければならない。
- 児童生徒のＩＣＴの活用が目的にならず，一つの学習道具として活用する指導法についての実践例の蓄積や研究，研修が必要である。
- 家庭との連携が大きく関わっている基本的生活習慣の確立やネット利用等，その重要性について考える機会を設定する必要がある。
- 新たな課題への対応が，教職員の負担増につながっているケースが見られる。こういった問題を解消できるように教頭の組織マネジメント力を高める必要がある。

西北支部

研究活動の概要

１　はじめに

西北支部では，第12期全国小中学校教頭会統一研究主題（令和２年度～令和４年度）「未来を生きる力を育む魅力ある学校づくり」（キーワード　自立・協働・創造）を受けて，全国共通研究課題の第３課題「教育環境整備に関する課題」に係る研究について，３年間取り組むことにした。

２　研究主題

「学校と地域との連携・協働を推進する教頭の役割」
『家庭における学習支援の在り方について』
～オンライン学習を通して～

３　研究計画

⑴１年次（令和２年度）

・研究主題の設定，研究計画の立案をし，西北小中学校教頭会研究委員会で提言をして，会員からの指導助言を踏まえて，研究内容を再度整理した。
・現状把握のためのアンケート調査の実施と集計・分析をし，実践研究への取組を行い，成果と課題を明らかにした。

⑵２年次（令和３年度）

・１年次の研究結果の成果と課題を整理し，発表資料，大会資料としてまとめた。
・西北小中学校教頭会夏季研修会において研究内容を発表し，協議会を実施することで，全会員で研究を共有し深めた。
・弘前市で開催された３年度青森県研究大会・東北地区研究大会青森大会（紙面開催）において実践研究を大会資料として掲載し，紙面での発表とした。

⑶３年次（令和４年度）

・２年間の研究結果の成果と課題を分析し，新たな取組の実践や課題の解決を図る。

４　研究の概要

◆西北管内における実態調査アンケートの実施

⑴家庭における学習支援への取組

・不登校児童生徒に対して，家庭における学習支援をしているか
・具体的にどんな学習支援をしているか
・新型コロナウイルス感染症対策による，学級閉鎖や臨時休業において，家庭における学習支援として，オンラインを活用した取組を実施したか
・家庭でインターネットに接続できるデータ通信量が無制限の回線がある児童生徒数
・家庭で学習用に使用できる情報機器（パソコン，タブレット，スマートフォン）がある児童生徒数

⑵タブレットの利用について

・使用しているタブレットの機種
・使用している学習支援ソフト
・タブレットを児童生徒に使用させる上で，課題だと感じていること
・タブレットの自宅への持ち帰りについて

５　研究の成果と課題

⑴成果

・「家庭における学習支援に係るアンケート」について，令和４年度の現状と令和２年度からの２年間の変化をとらえることができた。
・各校の端末の使用機種や学習支援ソフト及び，タブレット使用上の課題，また教頭として，日頃課題と感じている内容等が明確になった。

⑵課題

・使用しているタブレットの機種は，所管する教育委員会毎に異なるため，異動により身に付けた操作技術が生かされない可能性があり，新たに操作を習得するための研修が必要になる。
・学習支援ソフトについても，所管する教育委員会単位で異なっている。また，所管する教育委員会が同じでも各校によって使用ソフトに違いがあるので，異動等があると，それまでに獲得した技術が生かされない可能性があり，改めて操作方法を研修しなくてはならなくなる。

南地方支部

研究活動の概要

１　活動内容

４．15　第１回研修会（研究テーマについて）
５．17　春季研修会（講演会）
８．17　夏季研修会（情報共有）
11．18　秋季研修会（実践発表，法規演習）

２　研究の概要

⑴研究主題
「小中連携を推進するための教頭の役割について」
～小中連携の再構築　南地方の取り組むべき今後の方向性について～

⑵研究の視点
令和３年度の最終報告（各中学校区の実践に対する検証を行った結果）を受けて，小中連携を再構築していくためのより良い工夫や，教頭の役割や関わり方について明らかにする。

⑶研究方法
①夏季研修会（情報共有）
②秋季研修会（小・中学校からの実践発表）

３　春季研修会の概要

平川市立松崎小学校前校長，工藤清吾先生による講演会を行った。「教頭に望むこと」と題し，これまで勤務された学校での経験を基に，学校の危機管理における教頭の役割や，子どもの意欲を向上させる授業づくり等について，多様な視点から御教示いただき，心に残る講演会となった。

４　夏季研修会の概要

各中学校区の実践に対する検証を行った結果を基に，グループ協議を行う予定であったが，コロナウイルス感染症拡大防止の観点から，やむなくグループ協議を中止にし，今年度における各校の「現状」「これまでの成果」「今後の課題」「課題解決のためのアプローチ」「今後の方向性」についてレポートを作成した。後日，その情報を紙面にて配付し，各校・各地区の今後の小中連携の取組等に生かせるよう情報共有を行った。

５　秋季研修会の概要

⑴実践発表
①小学校部会（平賀東小学校　山口 朋子）
平賀東小が所属する中学校区の小中連携であるＴＳＳ（東中スチューデントシップ）の取組として，テーマを「豊かな心の育成と確かな学力の定着」に決め，学習指導部会，生徒指導部会，保健指導部会の３つに分かれて課題と解決策を探った様子や，ＴＳＳを進める上で大事になる教頭の役割等について，話題提供された。
②中学校部会（田舎館中学校　鎌田 寛市）
「田舎館村学校教育振興会」が小中連携の組織として機能し，学習指導部会，特別支援教育部会，生徒指導部会，保健部会，事務部会の５つに分かれ，個々に連携事業を展開していることや，その他の小中連携事業として小中学校交流会や授業公開・講演会を実施していること，小中連携改善のための具体的な取組や，成果と課題，方向性について話題提供された。

⑵講義「教育法規について」
講師　中南教育事務所主事　丹代　雄太　氏

６　今年度の研究の成果と課題

⑴成果
①本研究は４年間のスパンで中学校区ごとに研究が行われたため，夏季及び秋季研修会で得られた他地区の取組を所属地区にフィードバックするなど，ＰＤＣＡサイクルを生かした小中連携を推し進めることができた。
②夏季・秋季研修を毎年実施することで，小中連携の意義や連携事業の工夫点等，推進するために必要な教頭の役割が明確になり，学校間の連携強化につながった。

⑵課題
①小中連携の課題（テーマ設定，成果が見えにくい，教職員の負担）について，具体的な解決方法を実践し，検証するまでには至らなかった。今後も教頭会を通して，情報共有しながら工夫・改善を行い，各中学校区の実態に応じた小中連携を継続的に進めることが必要である。

上北支部

研究活動の概要

第12期全国統一研究主題「未来を生きる力を育む魅力ある学校づくり」を受けて，第５課題の「教職員の専門性に関する課題」に取り組む３年目となる。

１　研究主題

『教職員の資質向上と職務意識の高揚』（３年次）

２　研究のねらい

第５課題は，教育の専門家であることの意識と資質に関わり，教頭のリーダーシップに期待されるところが大きい内容である。また，育成すべき資質・能力を確実に育むための学習・指導方法がどうあるべきか考えることも必要になってくる。ここでは，教職員の資質向上を図るための研修，職務意識の高揚，服務規律の厳正，中堅教諭の育成などが課題となり，中でも教職員の資質向上や参画意識の高揚は，急務の内容となる。そのために，教頭としてこれまでの校内での研修のあり方を再考するとともに，多様な研修方法の導入などを検討し，教職員の資質向上と職務意識の高揚を図っていきたい。

３　研究の方法

⑴東，西，南，北の４地区に分かれ，各地区での共同研究とする。

⑵各地区の研究成果や課題は，「上北地方小中学校教頭会研究大会」で４つの分科会に分かれ発表し，研究協議を行う。４つの分科会の協議記録と助言資料等をまとめ，研究のまとめとした。

⑶４地区の研究成果や課題は，会報「教頭上北」に集約する。

４　研究の概要

⑴東地区

副題　「服務に関する課題の解決と教頭の役割」

目的　教職員の危機管理意識の向上と対応力の育成を目指して，「小中合同避難訓練」の在り方と，その実施に向けた校内研修及び事前指導の在り方について研究するとともに，その過程において必要な教頭の役割を明らかにする。

⑵西地区

副題　「ＯＪＴ（日常的な職場内研修）の在り方と教頭の役割」

目的　教育の専門家として矜持をいかにもたせ，教職員の資質・能力を伸ばし，創造性を発揮させるために，教頭として県の指標体系に基づいたＯＪＴに対してどう関わり，自校の教育効果をどう高めるのかを明らかにする。

⑶南地区

副題　「専門性を育む校内の研修の充実と教頭の役割」

目的　教職員の資質向上と職務意識の高揚をめざし，教職員の専門性を育む校内の研修の充実を図るための教頭の関わり方について，各校の実態と実践事例をもとに明らかにする。

⑷北地区

副題　「チーム力を高める協働体制の構築と教頭の役割」

目的　教職員の資質向上と職務意識の高揚を図るため，教職員や専門スタッフを含めた協働体制を構築しチーム力を高めるには教頭の役割はどうあればよいのか，各校の実践事例等を基に協議し明らかにする。

５　研究のまとめ

⑴成果

・ダイジェスト版の研修と掲示を行ったことで，昨年度以上に危機管理に対する意識や意欲の向上が見られた。

・個別で日常的に行われるＯＪＴでは，隙間時間を利用し，ＰＤＣＡサイクルが短期間で繰り返されたことで教職員の授業改善や意欲の向上につながった。

⑵課題

・教職員が積極的に研修を行ったり，日常的にコミュニケーションがスムーズに行われたりするような職場の雰囲気・環境づくりが重要。

・チーム力を高めるために，今まで行ってきたことの継続とうまく取り組めていないことの改善，教頭としての教職員への関わり方を考える。

下北支部

研究活動の概要

１　研究経過

⑴４月　定期総会・第１回部会研修会　実施
⑵６月　第２回部会研修会　実施
⑶７月　第３回部会研修会　実施
⑷全国大会兼東北大会岩手大会（オンライン発表大会）３名参加
⑸９月　秋季研究大会　実施
・グループ発表，助言　・講演会

２　研究の概要

「教育の情報化推進における教頭の役割」
（３年次）
～ＩＣＴ環境の整備と活用の在り方について～

⑴方法
①各校の実践事例と実態把握
②取組の４観点について各校の実践報告

⑵成果と課題
①情報教育を推進する指導体制の整備・充実について
【成果】　市町村教育委員会等が主催する研修会への参加や，外部講師を招いた校内研修等で１人１台端末を活用した教員の指導力向上に努めている。
【課題】　発達段階に応じた情報活用能力を育成するための各教科等の学習内容と関連付けた体系的・系統的な指導計画を作成する必要がある。

②学習指導におけるＩＣＴの適切な活用・推進について
【成果】　Googlemeetによる資料提示，Jamboardによる話合い活動，Googleclassroomによる音声（発音や歌声）のやり取りやプリント等の配付，ロイロノートによる思考のまとめなど，試行錯誤を重ねながら，１人１台端末の活用を工夫している。
【課題】　各校とも，ＩＣＴをどのように授業に取り入れていくかについて模索している段階であり，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたＩＣＴの効果的な活用については，今後更なる研究を重ねる必要がある。

③情報通信ネットワーク等を適切に活用した教育の推進について
【成果】　コロナ禍における児童生徒の学習機会を保障するためのリモート授業や端末の持ち帰りによるタブレットドリルを活用した家庭学習の実施など，情報通信ネットワークを活用した教育活動が行われている。
【課題】　Wi-Fiが普通教室と体育館のみに設置されているため，特別教室で行われる教科や別室登校している児童生徒へのリモート授業に活用できない。

④発達段階に応じた体系的・継続的な情報モラルの取組の充実について
【成果】　小・中学校ともに，生活リズムの乱れや児童生徒間トラブルの要因が情報モラルの欠如と捉え，実態を踏まえた，継続的な情報モラル教育に取り組んでいる。
【課題】　学校と保護者との間に情報モラルに関する意識に乖離がみられるため，学校が意図した指導に協力が得られない場合がある。

３　まとめ

管内は各小・中学校に１人１台端末が導入されて２年目となる。学習活動については日々試行錯誤し，研修を重ねながら取り組んでいる。

今後は，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けてＩＣＴを活用し，学力向上につながる研究を深める必要がある。

現代社会においては，児童生徒に情報機器を持たせない指導はもはや成り立たない。家庭と連携を密にしながら，児童生徒に情報及び情報技術の特性や健康に及ぼす影響を正しく理解させ，情報機器を正しく活用する能力を身に付けさせる指導が大切である。

三戸支部

研究活動の概要

１　研究主題

第２課題『子供の発達に関する課題』
「特別支援教育の充実に向けて
教頭としてどのようにかかわればよいか」
３／３年次
～通常の学級における
配慮が必要な児童生徒のために～

２　主題設定の理由

全国公立学校教頭会第２課題及び三戸郡小中学校教頭会研究部会議より，三戸郡においては，未来を生きる力を育む魅力ある学校づくりのために，特別支援教育の充実が必要であると捉えた。そして，その具現化のためには，教頭として特に通常の学級における児童生徒のための校内体制や外部との連携に効果的にかかわっていくことが大切であると考え，研究主題を設定した。

３　研究のねらい

未来を生きる力を育む魅力ある学校づくりのために，特別支援教育の充実は，必要不可欠であると捉える。通常の学級における配慮が必要な児童生徒への対応について，教頭の望ましいかかわり方を明らかにすることによって，特別支援教育の充実を図ることができるであろうと考える。

４　研究の概要

昨年度は，校内体制や支援方法の工夫を図る上での教頭のかかわり方を研究の視点とした。３年次となる今年度は，「外部機関や保護者との連携を効果的に図るために教頭としてどのようにかかわるか」を視点として研究を進めた。各町村教頭会において情報共有を密に行い，課題を整理して，他校の実践から課題解決のヒントを探るとともに，３年間の研究を提言としてまとめた。

５　研究のまとめ

⑴成果

○教頭は，外部機関や保護者との連携について，各校の実情に応じて進めようと苦心していることが分かった。また，その役割は，多岐にわたっていることが確認できた。

⑵課題

・外部機関との連携を一層進めるには，連携先の情報や活用事例など知識や情報の不足を補う必要がある。
・保護者とのかかわり方について，信頼を損なわないように体制整備する必要がある。また，そのためにも，校内の教師間の連携を密にする必要がある。
・学担の困りに寄り添いながら，教頭も自分事として先頭に立ち，解決や改善のために組織で対応していく必要がある。

⑶提言

①校内外の連携や調整の窓口としてかかわる役割
・連携先となる外部機関の情報収集，学校間の横の連携を進め，類似した事例に学ぶ。
・信頼を損なわないような保護者への伝え方やかかわり方について，教頭が中心となり，校内で確認したり学びあったりしていく。
・特別支援コーディネーターなどと連携して，チームで現状把握や外部機関との連携を進める。その際，学校側の自己解決能力が高まるような連携を進める。

②校内支援委員会等での助言や学担への援助を行う役割
・悩みを話せる職員室経営や学担のメンタルヘルスを気遣い，具体的な指導や助言を行う。
・職員会議などを活用した定期的な情報交換を行うとともに，日常的な情報共有や助言を大切にする。
・校内委員会では，支援の手立てと役割が明確となるようにコーディネートする。また，チームで支援に取り組む体制づくりや意識づくりにつなげる。

③体制づくりや専門性の向上などを進める役割
・教頭として自己の専門性を高め，助言して，校内研修の充実を図る。
・実情に応じて，特別支援教育コーディネーターを中心として組織的支援が機能するように調整する。
・チームで支援にあたることで，学担個人にかかる負担感を少しでも軽減する。

３年間の研究のまとめを各校での実践に生かし，郡内の特別支援教育の充実に寄与したい。

会員の広場

しずり雪

出会いに感謝して

青森小支部・高田小
伊　藤　永　子

本校は，青森市の南西部に位置し，田園地帯が広がる中に古くからある集落の中に建っています。町の高台には,杉の古木に囲まれて「熊野宮」があり神秘的な雰囲気を漂わせています。全校児童33名，今年度創立146周年を迎えます。

本校に赴任した４月，10名の職員のうち５名が異動したうちの一人ということもあり，分からないことも多く，何をどうしていいか分からず，仕事のミスで,他の職員や保護者の方に迷惑をかけることもありました。

それでも，毎月の「ＰＴＡ廃品回収」や，参観日・親子レク等で保護者と関わりをもっていく中で,「高田の子の素直さは，この保護者の温かさとおおらかさによるものだな。」と感じるようになりました。

「地域とともにある学校」は校長先生の経営方針のひとつです。田植えや稲刈りの体験をさせてくれる地域の方。りんごもぎを体験させてくれる地域の方。校庭の整備やクリーン作戦に協力してくれる町会の方々。「熊野宮」で毎年行われる大祭で奉納する「高田獅子踊」を伝承するために，学校に来て指導してくださる保存会の会長。地域の方みんなが，子どもたちと関わり，子どもたちを育ててくれています。自分にできることは，そんな「地域の方」と「学校」とをつなぐことではないかと思っています。失敗はするかもしれませんが，誠実に，謙虚に接することで信頼を築いていきたいと思います。

職員との信頼関係を築くのも大切な仕事です。複式を有しているため，教務主任は学級担任をしており，研修主任・生徒指導主任は複式を担任しています。他の職員も時間的に余裕のある人はいません。事務，技能主事も含めて10人みんなの力を合わせなければ，教育活動は成り立ちません。一人一人の個性を見極めながら，職員みんなが，気持ちよく働けるよう心を砕いていくつもりです。

おかげさまで

青森小支部・三内小
瀬　下　高　志

「教頭の仕事は激務です。ですがやりがいはある仕事です。がんばってください。」，３月新聞紙上を見て，20年も前に一緒の学校で勤務した先輩の先生からショートメールが届きました。身に余る励ましの言葉を受けそれが心の支えのひとつになっています。

学校の見回りのときに，お天気がよいと３階の奥の窓から岩木山を見ることができます。窓枠が額縁のようでとても気に入っています。そんな美しい姿を見られたときは，きっと充実していたのでしょう。

学校を見回る時間は振り返りの時間でもあります。「こうすればもっとよかったのかな。」,「あんな言い方しなきゃよかったのに。」・・・。上手くいかなかったこと，後悔していることとその日一日を思い返しています。それでも，何とか学校が進んでいるのは，同じ学校の職員のお陰なのです。

新米教頭は何も分かりません。提出書類，町会長さんが訪ねてきた，学校徴収金の設定は・・・。何も分からないところに様々なことが降ってきます。「教頭先生，これはこうやるとできますよ。」,「教頭先生，こんな風にやればいいと思います。」・・・温かい言葉に支えられながら過ぎていった４月，５月・・・。

しかし，そんな温かい言葉がけとは裏腹に自分の力不足さにどうしようもなく不愉快さを感じてしまう日々。全く周りの方々のお陰なのであります。

教頭として取り組まなければいけないことは様々あると思います。しかし，今，私が思うことは，いつか私の周りの方に恩返しをしなければいけないということです。どんなことが恩返しになるのかよく分かりませんが，目の前のことに向き合い対応していきたいと思っております。

「教頭とは職員室の学級担任だね。」，そんな風に話してくれた先輩の先生もいました。その日はその日しかありません。一日一日を大事にし，自分が生かされていることに感謝しながら与えられた職務に真摯に取り組んでいきたいです。

三内丸山学に期待

青森中支部・三内中
大　野　将　臣

本校から徒歩約15分の距離に，昨年７月に世界文化遺産に登録された三内丸山遺跡がある。また，本校は，今年度から教育課程特例校として，既存の音楽，美術，総合的な学習の時間の授業時数の一部を組み合わせて教科横断的な探究活動「三内丸山学」を行っている。

さて，「三内丸山学」である。私は密かに，ここに大きな期待を寄せている。「理解していることをどう使うか」における実践の場として。学習指導要領における育成すべき資質・能力の三つの柱の一つともされているが，三内丸山学を通して，学んだことを自分なりの言葉で様々な方面にアウトプットできるのではないかと考えている。世界文化遺産に登録された三内丸山遺跡のインパクトは大きい。世界中から人々が集まってくる。対観光客，対修学旅行生，対外国人，もしかすると今風の動画にして発信することもできるかもしれない。ダイナミック且つ切実な学びを提供したい。

そして私にはもう一つ，「特活」という血が流れている。教育行政に長らく身を置き，その間，幸い特別活動に関わる研究者や実践者と数多く出会い，自分自身の考えを随分整理することができた。基本的に教育活動は「特活の原理」が根底にあると考えている。この傾向はこれから益々強くなるものと捉えている。教師はあまり前に出ず，子供への説明は最低限に留め，生徒同士が主体的に話し合って解決していく。

そして,「なすことによって学ぶ」。この言葉のとおり，これから益々体験（の場を設定すること）が重要となる。「三内丸山学」。可能な限り，学校を飛び出し，そこで得られる体験は子供を大きく成長させると確信している。

そんなことを考えながら，赴任して一年が経とうとしている。本校の先生方は皆とても気が利き，フットワークが良い。生徒によく寄り添い，いつも親身になって対応している。その上，生徒の活躍を自分事のように笑顔で私に報告してくれる。その様子に私自身，何度も背中を押されている。本校生徒，教職員，そして地域の方々のために尽力したい。

謙虚な心，感謝の心を大切に！

弘前地区小支部・城東小
齊　藤　伸　弥

新任教頭として着任してから約半年。新天地での教頭業務は，全てにおいて，「初めてづくし」で戸惑うことが多かった。その度に，本校の校長先生始め，先生方や保護者，地域の方々に，様々な場面で助けられ，多くのことを教えていただき，また支えていただいた。新しい出会いがたくさんあったことに喜びを感じるとともに，感謝の気持ちでいっぱいである。

私が40歳になった頃，小学生時代に野球を教えてもらった尊敬する恩師から，「教頭にならないのか？」と聞かれた。「今は考えていません。」と答えると，その恩師に「教頭は職員室の担任。やり甲斐があるぞ。」と言われ，その言葉はその後も忘れることはなかった。しかしながら，当時，私は「60歳まで担任をしながら，子供たちに野球を教える」のが夢だったこともあり，さほど真剣に考えることはなかった。

３年前，その恩師が突然亡くなった。私は，その恩師を目指して小学校教員になったこともあり，大きなショックを受けた。同時に，恩師からの「教頭にならないのか？」という言葉を思い出した。管理職は一度諦めていたが，その年から再挑戦することにした。

そして，本年度から教頭になったわけだが，まだやり甲斐など感じる余裕などないというのが正直なところである。目の前の仕事をこなすだけの毎日ではつまらない，もっと職員室の担任らしく自分にできることはないかと考え，「教頭だより」を職員向けに発行することにした。「歩こう歩けばコンペに参加しませんか？」「これって著作権法違反？」など，とりとめのない雑感を載せ,暇なときに読んでもらう。それをきっかけに職員と対話をする。小さなことではあるが，これからもこのことは続けていきたいと思う。

最後にもう一つ。以前お世話になった教頭先生がいつも口にしていた言葉がある。「ありがとうございます。」その方は，常に謙虚な態度で，感謝の心を大切にしながら，いつでも温かく優しい言い方をする先生であった。その教頭先生を見習い，常に感謝の気持ちを忘れずに，温かくて何でも話ができる職員室を目指していきたい。また，先生方が常にやり甲斐をもって仕事をし，働き甲斐のある職場を目指してこれからも頑張っていきたいと思う。

一生懸命聴く

弘前地区小支部・常盤野小
佐　藤　志保子

私は，少年院に数年間勤務していました。14歳から20歳までの虞犯・触法・犯罪少年を収容する施設です。規律正しい生活の中で，家庭的な温かさも味わわせながら，矯正教育を行います。学級担任と同じように，数名の少年を担任し，面談や生活指導をします。

時折，少年たちとの面談の中でいくつか驚かされることがありました。その一つに，「人からかわいそうな子だと思われたい。」と言った少年がいたことが挙げられます。目の前にいた少年は，社会ではむしろ同情を拒み，虚勢を張ってきた少年でしたから，なおさら驚きました。それからも，何人もの少年の担任をしましたが，ほとんどの子がこの気持ちをもっていました。

同情されたい思いはどこからくるのでしょう。

・こんなことになったのは，自分のせいではないのに。（責任転嫁）
・自分のこれまでの生活の大部分が他者に影響されている。（他者への依存）
・偶然を受け止めきれず，特に悪い出来事を偶然のものとして断ち切れない。（低楽観視力）

調査したのではありませんが，このようなことが考えられそうです。そして，確実に言えることは，「自分のことを話したい。聴いてほしい。」という心の訴えが見過ごされてきた結果なのだろうということです。

元々もっている個々の性質と，複雑な人間関係のミスマッチが少年院に入るという現実を生み出すとすると，要因を一つのことに見いだすことはできません。しかし私たちは，様々な人間関係を包括している学校として何ができるかを常に考えていきたいと思います。

大学時代の恩師が，「とにかく聴く，一生懸命聴く。」と言った言葉が今でも心に残っています。

自分をかわいそうと思うのではなく，その現実との向き合い方と乗り越える力を育みたい。その前提として「とにかく聴く，一生懸命聴く。」というスタンスを忘れてはならないのでしょう。「聴く」ということにもう一度立ち返りたいと思う今日この頃です。

より良いコンサートマスターを目指して

弘前中支部・裾野中
三　上　剛　司

教頭は忙しいということはわかっていたつもりだったが，実際に教頭として働いてみると，その忙しさや仕事量，そして求められる気配り目配りは，想像をはるかに超えていた。仕事のほとんどが初めてのことで，勝手がわからず，まるで目をつぶって走っているような感じで，あっという間に毎日が過ぎた。創立 40 周年記念の行事など，最近は〝追われている〟というのが正直なところだ。

昨冬は大雪であったこともあり，遅い雪解けの後に姿を現した雪害は，その影響が夏季もしばしばみられ，その名の通り岩木山の雪深い裾野に建つ本校ならではといったところだ。これらへの対応は，技能主事，事務や教育委員会との連携なしにはできない。

私には音楽関係の友人や知り合いが多い。学校現場を知らない彼らに「教頭ってどんなことをするの？」と尋ねられる。役職名は知っているが，いったいどんな役割なのか疑問なようだ。そんな彼らに「学校をオーケストラだとすると，教頭はコンサートマスターみたいなものかな。」と言うと理解してもらえる。

コンサートマスターはオーケストラでバイオリンの一番前，指揮者のすぐ横で演奏している奏者だ。指揮者の意図を察知し，的確に団員へ伝え，具体的に演奏に反映させる。演奏者のまとめ役であり，指揮者と楽団員の連携を図る役割をする。演奏中，指揮者に何かがあればその代理もする。つまり，指揮者（校長）と様々な楽器の奏者で構成されるオーケストラ（教職員集団）が一つの音楽（教育活動）を作り上げるための，調整役やまとめ役だ。そのためには，普段から指揮者や奏者とのコミュニケーションを大切にし，常にオーケストラ（教職員集団）や個々の奏者（教職員個人）にも気をめぐらし，演奏（教育活動）の状態をよく見，よく聞き，良く感じ取るアンテナをもっている。

様々な仕事に追われているのが正直なところだが，学校というオーケストラの，良きコンサートマスター（教頭）として十分な働きができるよう，コミュニケーションを良好にし，よく見，よく聞き，よく感じ取れるようにしたい。また，校長と教職員，教職員同士の連携をより良いものにしていきたい。

偉大なる「下働きマン」へ

八戸小支部・長者小
上　柿　尊　志

八戸の大動脈ゆりの木通りに面し，寺社仏閣，社会教育施設，商業施設が並ぶ長者地区。にぎやかな通りから細い道を少し分け入ると，そこには静かな住宅地と畑が混在した異空間が存在する。歴史と伝統，文化が根付くコミュニティのまち，長者。地域住民は学校への関心が高く，各種ボランティアの登録者は100名に迫る。ＰＴＡ活動も盛んで恵まれた学校である。その分，次々に届く要望に理解が追いつかないこともあるが，校長をはじめ職員，ＰＴＡ役員の皆さんにたくさん支えていただき，間もなく２学期を迎える。感謝の連続である。

人は言う，「教頭は激務」と。前任校で教務主任を務め，隣の席でその様子を垣間見てきたが，見るのと実際にやるのとでは大きく違う。教頭職の関わる範囲は，教職員，子供，保護者，地域，企業や各種機関の方々と本当に幅広い。しかも時を選ばず不規則に重なって新たな「注文」が舞い込む。実に多忙だ。だが，ハードワークと捉えるのではなく，ワークハード，つまり一生懸命働いて，少しでも周りの皆さんの役に立つ仕事をさせていただけることは望外の喜びである。

健康計測機器メーカーとして有名なタニタの三代目社長・谷田千里氏は，「ぐちぐち議論をせず即実行」「人のせいにせず主体性をもつ」が人生において大切だと言い切る。赤字部門を複数抱えていた時期に35歳で社長就任。以後，「タニタ食堂」「タニタ健康プログラム」など事業改善を通して黒字化させた辣腕の経営者だ。覚悟を決め目の前の赤字を改善すべく仕事に没頭し，失敗に学ぶ中で閃きが生まれ，今日の成功に至ったという。稲盛和夫氏はじめ一流の経営者は皆，同じ仕事をするにも他人事ではなく「自分事」として取り組み，私心無く利他の精神を根底にもっている。

教頭職は職員間の連絡調整，校舎内の見回り，資料やお便りの作成・配布，各種打ち合わせや支払い，諸問題への対応など，仕事は多岐にわたり，規模や難易度も様々だ。教頭がこれらを自分事として取り組むことで，職員の仕事は捗り，保護者や地域の連携が強まり，子供たちの安全・安心な学びが保障され笑顔が増える。そしてやがて地域にその活力を還元できる。

ワークハードで「偉大なる下働き」を目指したい。

共に伸びよう！夢と笑顔と達成感を

八戸小支部・南郷小
戸　舘　典　子

本校は，八戸市内の南西部に位置し，不習岳や階上岳を望む自然豊かな環境にあります。窓からはそば畑の白い可憐な花をつけた優しい黄緑，木々の濃い緑，青い空と白い雲が見え，忙しさの中にも安らぎを与えてくれます。

本校は開校７年目の新しい学校ですが，140周年を迎えた市野沢小，中野小，鳩田小の伝統ある３校を統合してできた小学校です。４月には，笑顔をきらきらと輝かせ，元気な声で挨拶をしてくれる111名の子どもたちと出会うことができました。赴任してすぐの何も分からない私に，校長先生はじめ優しく声をかけてくださる職員の皆さんに囲まれて，早く私もこの素敵な南郷小の一員としてお役に立つ存在になりたいと強く思いました。開校時に新しく制定された校章には，優しさと温もりのある児童になってほしいとの願いを込め，中央部にひまわりの花が描かれています。その周りに３つのそばの実が配され，児童・保護者・教師の三位一体を表現しています。その思いは，地域や保護者の学校との関わりの強さからも感じられます。通学路の点検，校地内の環境整備，地域の伝統を受け継ぐ「ふるさと学習」等，たくさんの御協力によって学校教育が支えられていることが分かります。各地域に伝承されてきたえんぶりや神楽については，地域とのつながりなくては実施できない貴重な体験型の学習です。子供たちは，家庭はもちろん地域の皆様に支えられながら，のびのびと笑顔で学校生活を送ることができているのだと実感しています。

また，子供たち同士のつながりの温かさも感じられます。高学年児童は下級生たちに優しく接し，下級生たちは上級生たちを慕い，憧れの気持ちをもちながら学校生活を送っています。その中で，自然とお互いを思いやる伝統が受け継がれているように感じます。

本校のスローガンは，「共に伸びよう！『夢』と『笑顔』と『達成感』を」です。これからも地域の宝である南郷っ子を第一に考えながら，職員の皆さんと共働し，みんなの夢と笑顔と達成感を育む学校づくりを目指して，全力で取り組んでいきたいと思います。そして，自分も少しずつでも伸びることができるよう，自分を高める努力をし続けていきたいと思います。

新しい自分

八戸中支部・白銀中
大　下　　毅

本校は，創立75年を迎える八戸市内でも古参の中学校の一つであり，本年度の現生徒数は222名という中規模校である。

校長の経営方針は，新しい自分に会いに行こう！～「気づく・つながる・創り出す」自分破りへの挑戦～である。学校を船体（白銀丸）に見立て，

１．強固な船体（絆）～絆の力で気づく･つながる・創り出す～
２．心磨の帆柱～心を磨いて気づく・つながる・創り出す～
３．文武の帆柱（文武）～文武両道で気づく・つながる・創り出す～
４．健康の帆柱（心身の健康）～健康生活で気づく・つながる・創り出す～。

の４つの部品を磨き上げることを目指している。

しっかりとした船体が嵐の時でも凪の時でも航行するためには各乗組員がもつ力の発揮や協力，支援が不可欠なわけであり，船長のリーダーシップのもと，何とか半年間，航行に携わることができた。

市中体夏季大会では，男女バスケット部がアベック優勝，県夏季大会ではバスケット女子が第３位。市中体秋季大会ではバスケット男子が優勝，バレーボール女子が準優勝。県新人大会ではバスケット男子が優勝という快挙を成し遂げた。また，県中学校英語弁論大会では，暗唱の部・創作の部ともに準優勝という成績をもたらしてくれた。学校行事は，制限のある中で何ができるか工夫や知恵を出し合い，成功を収めることができ，乗組員の新しい自分への挑戦はとてもすばらしいと感じている。

さて，私も乗組員の一人であるが，自分破りができているだろうか。新しい自分に会えているだろうか。自問自答する余裕のない航海はまだまだ続くが，後悔はしないよう，乗組員みんなが，良好なコミュニケーションを図り，大事な場面では瞬間瞬間をとらえ進んで行きたいと思う。

地域を元気にする蟹中生を目指して

東郡支部・蟹田中
澤　田　　基

蟹田中学校の教頭を命ぜられたとき，真っ先に思い出したのが，蟹田の伝統芸能である風太鼓である。県中学校総合文化祭で初めて観た風太鼓の迫力と躍動感は今でも覚えている。風太鼓は当時観た時と状況が異なり，今は町の指導者の手を離れ，蟹田中学校の総合的な学習の時間に取り入れられている。全校での取り組みとなり，先輩から後輩へと受け継がれていく。春に新入生を加えて新しい体制でスタートしたが，子供たちの練習に向かう姿勢は真剣そのものである。様々な発表の場を経て，今年度の風太鼓も着実にレベルが上がってきている。蟹田中に赴任したこの年に，県中学校総合文化祭で発表することが決まっており，何か運命的なものを感じている。

新型コロナウイルスの流行で，これまで当たり前のように行われていたものが，ここ数年できない状況となっている。新型コロナウイルスが流行する以前は，近隣の養護老人ホームなどの施設と交流していたと聞いたが，ここ数年はできていないようだ。蟹中生は，これまで地域の力で育てられ，地域を元気にする存在であったに違いない。そういった足跡が校内のあちこちに見られる。

新型コロナウイルスの収束は未だ見えないが，今は高速ネットワークやＩＣＴ機器が整備されている。これまでのような形は取れなくても，ＩＣＴの強みを生かしてできることがある。こういった新しい技術の活用もしながら，地域の資源を有効に活用し，中学生の姿を地域に発信していく方法を考えていきたい。

４月に管理職として赴任し，目の前の業務をこなすのに精一杯だったが，半年が過ぎ，やるべきことが少しずつ見えてきたような気がする。よりよい学校づくりに向けて取り組むべき課題はたくさんあるが，教頭として，まず先生方がやりがいを持ち，働きやすい環境づくりに努めていきたい。そして先輩の先生方がこれまで作ってきてくれた蟹田中学校の伝統を受け継ぎながら，地域を元気にする蟹中生に育てていきたいと思う。

新しい車力小学校

西北支部・車力小
澤　田　尚　希

令和４年４月から，つがる市立車力小学校に教頭として赴任が決まりました。正直，果たして務まるのかと不安な気持ちが大きかったことを覚えています。

私が赴任した車力小学校は，全校児童が137名，教職員が19名の合計156名です。大きな不安とほんの少しの期待が入り交じるスタートでしたが，校長先生はじめ教職員，子供たちから温かく迎え入れてもらいました。

実は，十数年前に一度，旧車力小学校に勤務したことがあります。ここで旧車力小学校としたのは，現在の車力小学校は６年前に３校が統合され，校歌も校章もそして校舎も新しい学校となったからです。今年度が開校６年目ということで，まさに，全校児童が旧３校のことを知らない世代となり，この新しい学び舎で小学校生活をスタートさせたことになります。

校舎といえば，本校は車力中学校と廊下でつながっているので，思い立ったら行き来することができます。このメリットを生かし，車力小中一貫教育の様々な交流活動が進められています。子供たち同士だけでなく，教職員同士も会う機会が多いことから，私の中では中学校の先生方が同じ職場の仲間だと感じられたことが，新しい感覚でした。

手前味噌になりますが，車力小学校の子供たちは気持ちのよいあいさつをする子が多いです。玄関や廊下などですれ違うときには，笑顔で私より先にあいさつをしてくれます。４月には，人から笑顔であいさつを受けることはこんなに幸せなのかと感動したことを覚えています。このことから，私も子供たちに笑顔で接することを心がけ，この子供たちのために精一杯頑張ろうと思ったのは自然な気持ちでした。

ところが，この数か月，教頭としては仕事に追われるばかりで，子供たちのためになったことがあっただろうかと自らに問いかけ，落ち込むことがあります。思いどおりにいかないことはいろいろとありますが，新しい子供たちや保護者，地域の方々との出会いに感謝し，今また，ここから気持ちを新たに頑張りたいと思っています。

挑戦することを忘れずに

南地方支部・大坊小
須　藤　和　貴

４月に教頭として赴任して半年が過ぎました。素直で明るい66名の子どもたち，明るく優しい15名の教職員，協力的で熱心な保護者の方々，温かく見守ってくださる地域の方々のおかげで，充実した毎日を過ごすことができています。本当に感謝の日々です。

本校は，平川市の南西部の田園地帯に位置し，校庭のスキー山に上ると，東に八甲田連峰，西に岩木山を望める創立146年目を迎える歴史と伝統のある学校です。また，春は付近の桜並木の桜がきれいに咲き誇り，夏は緑の稲穂が風に揺れ，秋には校地内の柿がたくさん実り，そして校舎裏の樹木ではトンビが子育てを見せてくれる自然豊かな場所にあります。そんな素晴らしい教育環境の中で，「学校の主人公は子ども」という経営方針の下，家庭や地域と連携しながら，教職員一丸となって子ども一人一人の良さや可能性を最大限に引き出し，子どもたちの笑顔・元気・夢があふれる安全・安心な学校づくりをめざし，その具現化に向けて職務に励んでおります。

赴任当初，教頭１年生の私ができることは何だろうと自問自答しながら日々毎日が過ぎていましたが，まずはできることからということで，電話はすぐ出る，来訪者が見えたらすぐ自分からお迎えする（配達も），校内を歩いて新たな発見をするなど，すぐ動くという当たり前のことから始めました。教頭は，教職員はもちろん，子どもや保護者，様々な来訪者から，姿や行動，言葉の端々まで注目されている立場だと思います。みんなから頼りにされるには，人間として，教師として，さらに教頭としての自覚をもって誠心誠意勤務することが大事だと思います。

また，私は「挑戦する心」を大切にしています。人は，勇気を出して挑戦をするとき，新しい出会いや発見があり，成長するのだと思います。「子どもたちの笑顔・元気・夢」のために，保護者や地域の方の期待に応えられるよう，失敗を恐れず自らが挑戦する心を忘れずに頑張っていきたいと思います。

支えられる存在から支える存在へ

南地方支部・碇ヶ関小
山　本　　光

４月，生まれ育った下北を離れ，平川市立碇ヶ関小学校での教頭としての勤務が始まった。慣れない単身赴任の生活，初めての地域と学校。校内の教職員はもちろん，近隣校の教職員，教育委員会や教育事務所の方々もほぼ全てが初めて出会う方という中でのスタートだった。

これまで２校９年間，教務主任として５人の教頭先生のもとで仕事をし，様々なことを学ばせていただいた。教頭の仕事を間近で見ることで，その仕事の内容や重要性，責任について，ある程度は分かっているつもりだった。しかし，当然ながら実際の仕事の大変さは，私の想像を大きく上回るものであった。１学期は，学校の現状把握と各種提出物に追われる日々が続き，２学期になってようやく慣れてきたところである。

さて，本校は今年度より碇ヶ関中学校に増築した新しい校舎で，小中併置校としての新たな歴史をスタートしている。自然豊かな環境の中，56人の児童は早々に新しい環境に慣れ，日々元気に過ごしている。教職員も皆熱心で良い方ばかりで，アットホームな学校である。また，今年度より学校運営協議会が組織されコミュニティースクールも始まっている。コロナ禍のため，ＰＴＡや地域との関わりは縮小せざるを得ない状態ではあるが，地域の中で「学校」が持つ役割は大きく，地域との窓口としての教頭の役割もしっかりと果たしていかなければならないと考えている。このような中，校長からは管理職としての責任や職務について指導・助言いただくと共に，様々な面で声をかけていただいている。また，併置となっている中学校の教頭には実務の面でアドバイスをいただき，助けていただいている。

多くの方に支えられ，まだまだ物足りない教頭ではあるだろうが，児童に寄り添い，家庭や地域と連携し，校長の学校経営方針の実現のため，教職員の要となるよう精一杯努めていきたい。そして，しっかりと周りを支える存在となり，学校のスローガンである「やる気いっぱい 笑顔いっぱい 元気いっぱい 三笠っ子」となる子供たちを，「やる気いっぱい 笑顔いっぱい 元気いっぱい」の本校の教職員と共に育てていきたい。

地域と共に

上北支部・大深内中
船　水　純　子

本校は十和田市の北部に位置し，昨年度「創立70周年並びに少年駒踊り50周年記念式典」が行われた地域と共に歩む学校である。伝統芸能「駒踊り」は本校の核となる活動であり，様々な場所でその活動を披露している。

教頭職として本校に赴任し早７か月が経過した。４月の新任式で「私がこの学校で楽しみにしていることは３つあります。１つ目は生徒の皆さんと一緒に勉強すること，２つ目は駒踊り活動，３つ目は新校舎での生活です…」とスピーチしたことはなぜか鮮明に覚えているのだが，その後，日々の業務や諸行事に追われ，自分がこれまで何をしてきたのか正直なところよく覚えていない。また，様々な出来事に翻弄され，時に自分を見失いそうになることもあった。しかし，そんな自分を温かく見守ってくださる校長先生を始め，労いの言葉や差し入れで応援してくれる職場の先生方，真剣な眼差しで授業を受けてくれる生徒達，学校をサポートしてくださる保護者や地域の方々，以前お世話になった方々からの励ましのメッセージのおかげでなんとかここまで進んでくることができた。

行政職から教頭職としての現場復帰であったが，教職とは本当にやりがいのある素晴らしい職業であると改めて思う。駒踊りに生き生きと取り組む生徒達。文化祭では少ない人数であるにも関わらず難しい合唱曲を完成させた生徒達。授業中に答えに窮している生徒を待ちヒントを与えて助けてあげようとする生徒達。このような生徒達を見る度に感動し，胸が熱くなる。また，環境整備作業では早朝からの活動でも，多数の保護者が参加してくださったり，駒踊り練習には毎回のように地域の方々が指導に来てくださったりすることにも本当に感謝している。

本校は12月には新校舎へ引越し，令和５年４月からは学区の小学校２校から児童を迎え入れ小中一貫教育校として新たなスタートを切ることになる。

まだまだ力不足であることを痛感する日々であるが，「できない理由を考えるのではなく，できる方法を考える」ことを常に意識し，地域と共に歩む学校づくりのために力を尽くしていきたい。

生徒の成長のために

下北支部・大間中
南　　玲

本州の最北に位置し，最果ての地で寂しげで何もないというイメージが強かった大間町も今や町民が中心となった町おこしとマグロにより全国的に有名な町である。

その町にある本校は生徒数 139 名，教職員が20名である。かつては元気がありあまりヤンチャな生徒が多かった学校も落ち着いた態度で授業に取り組み，部活動では全国大会常連校の剣道部をはじめ，多くの部活動が地区や県大会で活躍している。また，学校からは津軽海峡が望め，天気が良い日には北海道の町並みや時期になると漁り火やマグロ漁をしている船なども見ることができる最高のロケーションで毎日を過ごしている。

本校は昨年度，同町内の奥戸中学校と統合し，今年度は統合２年目となる。赴任した際に校長と経営方針等について話をしたとき,校長より「統合１年目は職員,生徒,保護者ともに緊張感をもって,様々な活動を行ってきた。今年度は統合２年目で，土台を築く年となる。また，慣れからくる油断が一番危惧されるので我々,管理職自ら気を引き締めて日々の教育活動に取り組んでいかなければならない。」と言われ改めて教頭の職務である「校長を助け，校務を整理し…」を強く意識したところである。

いざ，始まると想像以上の忙しさにうまくいかない毎日で，頼りない教頭で申し訳がないが校長のアドバイスや周りの職員の助けがあり，なんとか日々を乗り切っているというのが正直なところである。

しかし，いつまでもそれらに甘え，新米教頭といっていられないので，赴任して半年経つが教頭の職務を意識し，生徒のよりよい成長のために，まず，職員が力を発揮しやすい物的環境，組織的環境，適材適所等の環境を整えていこうと考えている。（いるだけで,実際はどうなのかわからない。）そして，校長の経営方針の下，精一杯取り組んでいきたいと思う。

「ら　し　く」

三戸支部・道仏中
今　田　華　織

朝の海を眺める。これまでに海を見られる学校に勤務したことがなかったので，新鮮な朝を毎日過ごしています。春は，校庭の桜の淡い色の向こうに碧い海。夏には灰色と赤の夕焼け。夕方も，３階に上るのが今は楽しみです。

階上町には10年前まで10年間勤務していたので，７年ぶりの学校勤務に多少の緊張はあったものの，懐かしさを感じながら４月を迎え，「階上の地域の皆様や教育委員会の方々，職員室の先生方が味方と思えば,100人力！」自分にやれることをひとつひとつやることを心に誓いました。「わからないことを焦りにするのは危険！」と自分に言い聞かせ，日々を過ごしています。

私がこれまでに出会った教頭先生方はみな温かで,私のああしたい，こうしたいに耳を傾け，否定せず「やってごらん！」と背中を押してくださる方々ばかりでした。そして，教頭らしくない教頭になりたいと語っておられた教頭先生に何度励まされたことか。私も斯くありたいと思いながら，日々に追われるばかり。はじめての防護服を着ての巨大ハチの巣駆除で蜂に追われながらも，一休さんのように，慌てない，あわてない…とつぶやいています。そしてこのように，じっくり前を向いて仕事ができるのも，迷えば進むべき方向を指さし，見守ってくださる校長先生，そして100人力で支えてくださる皆様がいてこそと思わずにはいられません。

今日「先生，最近理科が楽しいんですよ。わかるようになると勉強って楽しいですよね。」と話してくれた生徒がいました。春先,学校に来るのが辛そうだった子。嬉しさとともに，ハッとした瞬間でした。毎日が勉強！と思っていますが，こども支援センターや教育事務所で特別支援教育を担当してきたことは，学びの機会が与えられていたのだと改めて肝に銘じました。「子供にも大人にも寄り添うことができるように」と。

このようなことを日々思いつつ，やはり私は，わたしらしく，みんなの笑顔のために，まず自分が笑顔でいよう。そして「みんなとともに」になりますように。

青森県小学校長会・中学校長会・小中学校教頭会・学校事務研究協議会

４ 団 体 連 絡 協 議 会 の 概 要

４団体連絡協議会要請事項

青森県小中学校教頭会

１　義務教育費国庫負担制度と人材確保法の堅持について

⑴　学校教育の水準の維持向上のために，優れた人材を確保するための「人材確保法」の堅持

⑵　教育の機会均等の原則を担保するために，教育関連予算に係る財源の確保

⑶　すべての児童・生徒が一定水準の教育を受けられるため，「義務教育費国庫負担制度」の負担率２分の１への復元（将来的には全額国庫負担の実施）

２「学校力」の向上を図る教職員の定数改善について

⑴　教職員の配置基準等の拡充

ア　あおもりっ子育みプランの中学校３年生までの完全実施

・少人数学級（小１～中３まで全ての学年であおもりっ子育みプランの実施）実現のための教職員の配置・学年１学級（34 ～ 40 人）の学校における非常勤講師の時間数の見直し

イ　教頭の定数外配置

ウ　事務職員・養護教諭の全校配置

・全ての学校に事務職員，養護教諭の配置

エ　専任教務主任の全校配置

・学校の規模ではなく，全ての学校に専任の教務主任の配置

オ　正規免許保持教員の適正配置（中学校）

・正規免許教員が適正に配置され，指導することによる教育格差の解消

カ　特別支援学級の定数改善

⑵　特別支援教育の充実

ア　特別な配慮を必要とする児童・生徒のための支援員の確保

・通常学級に在籍する特別な支援を要する児童・生徒のための教員及び支援員の配置（支援員の時間数の見直し）

・特別支援学級の定数改善及び教員及び支援員の配置

イ　専門的人材の確保

・ＡＤＨＤ，自閉症等への専門的知識を持った人材の確保

・いじめ，不登校等へ対応するためのＳＣ(スクールカウンセラー)，ＳＳＷ(スクールソーシャルワーカー)，校務支援スタッフ，ＩＣＴ支援員等の確保並びに配置の拡充

令和４年度青森県小学校長会並びに中学校長会の要望についての県教委からの回答の中から、県小中学校教頭会として特化した要望に対する回答を抜粋して掲載した。

１　義務教育費国庫負担制度と人材確保法の堅持について

⑶　すべての児童生徒が一定水準の教育を受けられるため，「義務教育国庫負担制度」の負担率２分の１への復元（将来的には全額国庫負担の実施）

【回答】

義務教育費国庫負担制度は，義務教育費国庫負担法に基づき，都道府県が負担する公立義務教育諸学校の教職員の給与費等について，その一部を国が負担するものであり，義務教育について，義務教育無償の原則にのっとり，国民の全てに対しその妥当な規模と内容を保障するため，国が必要な経費を負担することにより，教育の機会均等とその水準の維持向上を図ることを目的としているものであります。

この制度による負担率については，平成 18 年４月に義務教育費国庫負担法の一部改正により２分の１から３分の１に改正され，都道府県の負担増分については，地方交付税により措置することとされております。

県教育委員会では，義務教育の機会均等と教育水準の維持向上のため，国の責務として必要な財源を保障するよう，全国都道府県教育長協議会及び全国都道府県教育委員協議会を通じて，国に対して本年７月に要望を行っているところであり，今後も引き続き要望して参りたいと考えております。

２　「学校力」の向上を図る教職員の定数改善

⑴ア　教職員の配置基準等の拡充

・少人数学級（小１～中３まで全ての学年であおもりっ子育みプランの実施）実現のための教職員の配置

・学年１学級（34～40人）の学校における非常勤講師の時間数の見直し

【回答】

「あおもりっ子育みプラン21」による少人数学級編制については，学級経営の改善及び学習指導上や生徒指導上の効果に関し，学校などから高い評価を得ているところであり，現在，小学校全学年及び中学校１年生を対象に実施しているところです。

また，異なる学年を対象に指導する複式学級の指導の充実を図るため，小学校の複式学級で，一定の児童数以上の場合には非常勤講師を配置しております。

少人数学級編制については，第一義的には国の責任において実施されるべきものであることから，これまでも，全国都道府県教育長協議会を通じて，小学校の35人学級の計画的な整備等について要望しているところです。また，令和４年１月には，青森県議会議長，青森県教育委員会教育長連名で，同様の内容を要望するとともに，６月にも，本県の重点施策提案として，国に要望活動を行ったところです。

今後も国の動向を踏まえつつ，本県における少人数学級編制の推進に努めて参りたいと考えております。

少人数学級編制の取組のほか，国の加配定数（指導方法工夫改善定数）を活用して，ティーム・ティーチングや習熟度別指導などを行うための教員を配置し，指導の充実を図っているところであり，今後も国の加配定数を活用しながら，教員配置の充実に努めていくこととしております。

２　「学校力」の向上を図る教職員の定数改善

⑴オ　正規免許保持教員の適正配置

・正規免許状教員が適正に配置され，指導することによる教育格差の解消

【回答】

教職員の配置については，いわゆる義務標準法に基づき，当該学校の学級数や生徒数により行っており，４学級以下の学校では，全教科に対応する教員数を配置できない状況にありますので，免許外教科の許可により指導していただいているところです。また，学校課題等により免許外教科の許可が必要となる場合もあるものと考えております。

公立中学校における免許外教科の教授担任許可状況については，特に技能教科の許可件数が多い状況にあります。

免許外教科の教授担任を解消する方策として，本県においては，平成25年度から，国の補助事業を活用して４学級以下の中学校を有する市町村に非常勤講師を１名配置し，教科指導の充実に努めております。

また，県教育委員会では，教職員の配置を充実するため，これまでも，全国都道府県教育長協議会を通じて，中学校の免許外教科担任が生じる小規模校に対して義務教育の機会均等と教育水準の維持向上のため，加配等による定数措置を講じるよう国に要望してきたところであり，今後も，要望して参りたいと考えております。

なお，令和元年度実施の教員採用候補者選考試験から，複数免許状を有する受験者に対する専門教科試験への加点制度を導入し，幅広い知識や特定の資格を有する教員の確保に努めているところです。

２　「学校力」の向上を図る教職員の定数改善
⑵特別支援教育の充実
ア　特別な配慮を必要とする児童・生徒のための支援員の確保
・通常学級に在籍する特別な支援を要する児童・生徒のための教員及び支援員の配置（支援員の時間数の見直し）
・特別支援学級の定数改善及び教員及び支援員の配置

【回答】
特別支援学級は増加傾向にあり，また，通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への対応も含めて，担当する教員の確保が課題となっております。
公立小・中学校の学級編制及び教職員の配置については，いわゆる義務標準法に基づき行っているところです。
学級編制基準の引下げについては，第一義的には国の責任において実施されるべきものであることから，これまでも，全国都道府県教育長協議会を通じて，特別支援学級の編制基準の引下げ及び教職員定数の改善について要望してきたところです。また，令和４年１月には，青森県議会議長，青森県教育委員会教育長連名で，同様の内容を要望するとともに，６月にも，本県の重点施策提案として，国に要望活動を行ったところです。
なお，令和２年度に「小・中学校教職員配置基準」を見直し，特別支援学級の担当教員１人当たりの指導児童数が平均して６人を超える学校には，教員１人を増配置したところであり，各学校では，児童の障害の状況等に応じて活用いただいているところです。
次に，特別支援教育充実のための専門教員の配置についてです。
県教育委員会では，平成22年度から小・中学校と特別支援学校の計画的人事交流を実施し，教員の資質・能力及び専門性の向上を図っているところです。
また，県費負担教職員の人事異動方針において，「特別支援学級担当者については，特に意を用い，特別支援教育の専門性を有する教員を適正に配置するよう努める。」としているところです。
さらに，令和２年度実施の教員採用候補者選考試験から，特別支援学校教諭免許状を有する受験者に対する専門教科試験への加点を行っており，今後もこれらの取組を通して，特別支援教育に関する専門的知識や経験を有する教員を配置するよう努めて参ります。
このほか，現職教員を対象として，夏季及び冬季休業期間中に免許法認定講習を開催し，特別支援学校教諭免許状所持者の増加に向けた取組も行っておりますので，教員の専門性向上のため，所属教員の免許状取得促進に御協力くださるようお願いします。
専門教員の派遣については，小中学校等に在籍する発達障害を含む障害のある児童生徒の学級担任等を専門的立場から支援するとともに，校内支援体制の充実を図るため，特別支援教育巡回相談員を委嘱し，学校からの要請に応じて派遣しております。要請は年々増加傾向にあることから，相談員の人員の確保と計画的な派遣に努めて参ります。

２「学校力」の向上を図る教職員の定数改善
⑵イ　専門的人材の確保
・学校支援スタッフ，ＩＣＴ支援員等の確保並びに配置の拡充

【回答】
日常的な教員のＩＣＴ活用の支援を行うＩＣＴ支援員につきましては，国から４校に１人分の配置を目標として，地方財政措置が講じられており，今後も継続されるよう全国都道府県教育長協議会を通じて，国に要望しているところです。
ＩＣＴ教育環境の整備につきましては，今後とも，国のＧＩＧＡスクール構想に基づき，県内どの地域においても推進されるよう，各市町村教育委員会へ国の公立学校情報機器整備費補助金制度の情報提供及び活用への働きかけを進めて参ります。

編集後記

会員の皆様におかれましては，新型コロナウイルス感染症の第７波・第８波と途切れることなく続く猛威への対策をしながらの教育活動に心血を注がれ，多忙を極めた一年間であったことと拝察いたします。
さて、令和５年５月８日から新型コロナウイルスが２類相当から５類に移行されることが決まりました。とは言え、当然のことながら季節性インフルエンザと同様の対策で新型コロナウイルスの感染が防げるわけではないため、５類移行後の教育活動をどのように展開するかの検討で、年度末や年度初めも悩みが尽きないのではないかと思われます。会員の皆様におかれましては，くれぐれも健康に留意され，それぞれのお立場で御活躍されることを願っております。

青森県小中学校教頭会会報 あおもり　第116号　令和５年３月７日　印刷発行　発行所　青森県小中学校教頭会　編集責任者　広報委員会　印刷所　（有）アート企画